

感染症定期報告感染症別文献一覧表 (2023/8/1~2023/11/30)

令和6年3月22日
令和5年度第3回
医薬品等安全対策部会
資料 3-1

ID	感染症(PT)	出典	概要
1	インフルエンザ	CDC FluView.2023/07/29	<p>ミシガン州保健福祉省は、新型インフルエンザA型ウイルスによる2件のヒト感染を報告した。患者1名はインフルエンザA(H3)変異株(A(H3)v)ウイルスに感染し、もう1名はインフルエンザA(H1N2)vウイルスに感染した。インフルエンザA(H3)v感染に関連する疾患は、2023年7月22日までの週(第29週)に発生した。地元の公衆衛生当局による調査により、患者は発病前に、農産物品評会でブタに接触していたことが判明した。同品評会ではブタからインフルエンザAウイルスが検出された。インフルエンザA(H1N2)v感染に関連する疾患は、2023年7月29日までの週(第30週)に発生した。地元の公衆衛生当局による調査により、患者は発病前に農業品評会でブタに接触していたことが判明した。これは、インフルエンザA(H3)vに感染した患者が参加したのと同じ農業品評会ではなかった。どちらの患者も18歳未満で、入院せず、オセルタミビル投与を受けて、病気は回復あるいは、回復中である。いずれの患者にも関連するインフルエンザAウイルス変異株のヒトからヒトへの感染は確認されていない。調査は継続中である。これらは、2023年に米国で報告された最初の変異型インフルエンザAウイルスである。</p>
2	インフルエンザ	Khmer Times. https://www.khmertime.com/501357799/study-reveals-diverse-swine-flu-strains-circulating-in-cambodian-pigs-for-15-years/	<p>シンガポールのDuke-NUS Medical Schoolの科学者らは、過去15年間カンボジアのブタ集団内で密かに流行していた、これまで知られていなかったブタインフルエンザウイルスの数種類の株を特定するという重要な発見をした。研究を実施するため、研究チームは2020年3月~2022年7月にかけて、カンボジアの4つの州の異なる群にある18の食肉処理場でブタから4089個の鼻腔ぬぐい液を採取した。これらのサンプルのうち、72例のブタがインフルエンザAウイルスの検査で陽性であった。PNAS誌に掲載されたこの研究結果では、9つの異なるブタインフルエンザA型ウイルスグループの存在が明らかになり、そのうち少なくとも7グループは2~15年間検出されていなかった。これらのグループの中には、ヒトからブタに感染し、10年間気付かれずに循環していた複数のH3系統が含まれていた。2009年のパンデミック中にヒト由来のH1N1サブタイプも検出され、優勢であることが判明した。さらに、研究チームは、トリに由来する新たなブタEuropean H1N2変異株(北米の遺伝子を保有する)も分離したことなどについて記載。</p>
3	ウイルス感染	IASR. 44(2023)109-111	<p>2022年初夏に茨城県で心筋炎で亡くなられた患者について、2018年に国内のマダニから初めて分離・同定されたオルソミクソウイルス科トゴウイルス属に属するオズウイルスによる感染症と診断された。オズウイルスが検出されたヒト症例、死亡例はこれが世界で初めての報告となる。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
4	ウイルス感染	PLoS Negl Trop Dis. 17(2023)e0011374	CatQueウイルス(CQV)とOyaウイルス(OYAV)を含むOrthobunyavirus catqueenseは、ペリプニヤウイルス科オルソブニヤウイルス属の1種で、CQVは蚊とブタに広く分布している。OYAVは2000年にマレーシアのブタから初めて分離され、中国の蚊とヌカカ、ベトナムの蚊、インドのヒトとムクドリに由来する株を含め11株が同定されている。本研究では2013年に中国雲南省で採取されたヌカカから分離されたOYAV新規分離株SZC50について、様々な細胞株での複製、ゲノム配列決定、系統発生解析、動物集団における血清陽性率調査、動物モデルでの病原性調査を行った。2013年7月に雲南省Shizong郡WulongのLongburuiウシ農場で採取したヌカカ試料を粉碎、遠心分離したものをBHK-21細胞に接種した。1例の試料(SZC50)で細胞変性効果(CPE)が誘導され、CPEが観察された培養細胞上清から抽出されたRNAの完全ゲノム配列を決定した。ウイルス溶液はBHK-21、MA104、PK15、MDBK、Hela、C6/36、GOATTE細胞株に接種され、CPEが観察されたのはMA104細胞とPK15細胞だけだった。増殖効率はPK15細胞(ブタ腎臓由来)が最も高かったが、HeLa細胞(ヒト由来)とMA104細胞(サル由来)においても効果的に増殖できた。Simbu血清群ウイルスのS、M、Lセグメント由来ORFの系統発生解析で、SZC50がOYAVの新しい分離株であることが確認された。雲南省の13都市から採取した831例の血清試料(ブタ736例、ウシ45例、ヒツジ50例)の分析では、OYAV SZC50中和抗体価が1:20以上であったのは270例(ブタ270例、ウシ0例、ヒツジ0例)だった。Kunmingマウス(成体、乳飲みマウス)、C57BL/6マウス(成体、乳飲みマウス)にSZC50を接種した結果、乳飲みKunmingマウス、成体及び乳飲みC57BL/6マウスは全て死亡し、感染マウスの解剖で肝臓、小腸、大腸、心臓、脾臓、肺、脳、腎臓、胃に軽度から重度の臓器損傷が認められた。11日齢ニワトリ胚尿膜腔への様々なウイルス用量のSZC503接種では、接種後5-6日で死亡が認められ最高致死率は37.5%だった。本研究は、中国雲南省のヌカカにおけるOYAV分離株の最初の明確なエビデンスを示した。動物とヒトに対するOYAVの潜在的感染リスクに関して、OYAVの系統的調査、そのベクターと自然宿主の調査を実施すべきである。
5	ウイルス感染	Viruses. 15(2023)956	コロナウイルス科アルファコロナウイルス属に属するブタ流行性下痢ウイルス(PEDV)は、ブタ新生仔において致死的な重度腸炎を引き起こす。以前の研究では、PEDVがヒト膜アラニルアミノペプチダーゼを認識し、Huh-7(ヒト肝臓)とMRC-5(ヒト肺)細胞を含むヒト細胞に感染することが示されたが、PEDVがヒト小腸上皮細胞に感染するかどうかは明らかではない。ブタ小腸上皮細胞はPEDV感染の標的細胞であり、PEDVがヒト小腸上皮細胞に感染するかどうかを判断することは、ヒトにおけるPEDV異種間感染の潜在的リスクを明らかにするために重要である。本研究ではヒト小腸上皮細胞へのPEDV感染を試験した。ヒト小腸上皮細胞(FHs 74 Int細胞)に、PEDV LJX株及び古典的弱毒化ワクチン株であるPEDV CV777株を接種し、RT-PCRとウエスタンブロッティングを用いてM遺伝子mRNA転写物とN遺伝子蛋白質濃度の検出を行った。CV777株を接種したFHs 74 Int細胞ではPEDV N蛋白質は検出されず増幅産物も示さなかったが、LJX株を接種した細胞ではPEDV N蛋白質が検出されPEDV M遺伝子増幅産物が示された。PEDV CV777株はFHs 74 Int細胞に感染できないが、LJX株は感染できることが示された。電子顕微鏡による観察でも、感染24時間後のFHs 74 Int細胞にPEDV粒子が存在することが示された。LJX株を接種したブタ小腸上皮細胞(IPEC-J2細胞)とFHs 74 Int細胞における増殖を比較すると、いずれの細胞でもPEDV M遺伝子のRNA量は感染12時間後でピークに達し、その後は24時間後から48時間後にかけて徐々に減少した。IPEC-J2細胞とFHs 74 Int細胞におけるPEDV LJX感染の増殖パターンは一致していることが示唆された。本研究の結果は、PEDVがFHs 74 Int細胞に感染できることを実証し、PEDVが種を超えて広がる可能性があることを示唆した。CV777株がFHs 74 Int細胞に感染できなかった原因、PEDVが小腸上皮細胞感染において使用する受容体などを明らかにすることで、PEDVの異種間伝播特性に関する洞察が得られるだろう。
6	ウイルス感染	国立感染症研究所. https://www.niid.go.jp/niid/ja/route/arthlopod/1771-idsc/iasr-news/12108-521p01.html	オズウイルス(Oz virus: OZV)はオルソミクソウイルス科(Family Orthomyxoviridae)トゴトウイルス属(Genus Thogotovirus)に分類される新規RNAウイルスである。2018年に本邦でタカサゴキアラマダニ(Amblyomma testudinarium)より分離同定され、野生動物の血清抗体調査によって国内での広い分布が予測されていたが、世界的にヒトでの発症や死亡事例は確認されていなかった。今回初めて、発熱・倦怠感等を主訴として受診し、心筋炎により亡くなられた患者が、ウイルス学的・病理学的にOZV感染症と診断されたので報告する。

ID	感染症(PT)	出典	概要
7	ウエストナイルウイルス感染	Front Vet Sci. 10(2023)1126199	<p>ウエストナイルウイルス(WNV)は主に鳥好性のイエカ属(Culex)の蚊によって伝播される。ウイルスを保有する鳥類から吸血したイエカがヒト、ウマ、反芻動物、野生動物、爬虫類などの他の脊椎動物から吸血することで、時折WNVのスピルオーバーが発生する。WNV感染はウマで広く報告されており、ヤギ、ヒツジ、ウシでもごく少数の臨床疾患と病原性株の実験的感染が報告されている。これらの種は行き止まり宿主でありウイルスの増幅と伝播に関与しないが、主にウマにおけるWNV感染は物の所有者に多大な損失をもたらし、ヒトを含む他の種を含む潜在的なアウトブレイクにつながる可能性がある。マレーシアでは最近の研究で、鳥類、マカク、コウモリ、ブタにおいてWNV血清陽性やRNA検出によりWNV感染が示されているが、家畜反芻動物のWNV感染に関する利用可能な情報が存在しない。そこで本研究では、血清学的方法と分子学的方法を用いてウシ、ヤギ、ウマにおけるWNV曝露を明らかにした。2017-2019年に各地の農場と厩舎からウシ(n=83)、ヤギ(n=29)、ウマ(n=91)の血清試料と鼻咽頭スワブ試料を収集した。血清試料の抗WNV IgGスクリーニングの結果、WNV血清陽性率はウシが32.5%(27/83)、ヤギが48.3%(14/29)、ウマが53.9%(49/91)であった。血清試料の抗日本脳炎ウイルスIgGスクリーニングの結果、ウマの37%(34/91)、ウシの2.4%(2/83)が交差反応性日本脳炎ウイルス抗体陽性であった。RT-PCRによる鼻咽頭スワブ試料からのWNV RNA検出では、全体の分子的陽性率は3.5%(7/203)、ウマが7.7%(7/91)で、ウシとヤギからはRNAが検出されなかった。本研究で得られた7つの配列は全て、最尤系統発生解析の結果WNV系統2クレードにクラスター化した。本研究の分離株は南アフリカのヒト神経侵襲性株及びマレーシアの野鳥由来株と非常に近縁で、ヌクレオチド配列比較でわずかな変異を示した。本研究は、マレーシアの家畜化哺乳類においてWNVが検出された最初の報告である。WNV感染は反芻動物では一般的ではなく、反芻動物におけるWNV感染を報告した研究はほとんどない。中和アッセイと鼻咽頭スワブ以外の試料を用いた更なる研究で、マレーシアにおけるWNVのより詳細な情報が得られるだろう。</p>
8	ウエストナイルウイルス感染	ProMED-mail 20230823.8711802	<p>問題点:ウエストバージニア州で献血によるウエストナイルウイルスの初の感染例が報告された。【概要】ウエストバージニア州で献血によるウエストナイルウイルスの初の感染例が報告された。疾病管理センターによると、この献血は「推定ウイルス血症献血者」(PVD: presumed viremic blood donors)からのもので、献血後に血液中のウイルス検査で陽性反応が出たが、献血時には症状が見られなかった。米国全土で、2023年現在、合計27の州でヒトのウエストナイルウイルス感染症例が報告されている。ウエストナイルウイルスは蚊を媒介とし、CDCの調査結果によると、80%にはウイルスの兆候は見られないが、5人に1人には発熱、発疹、頭痛などの症状が見られる。軽度の症状であればほとんどが完治するが、倦怠感が数ヶ月続くこともある。医療専門家は、蚊に刺されるリスクを減らすために、虫除けスプレー、長袖の服装、ズボンの着用を勧めている。2023年8月15日までのCDCの最新データでは、今年(2023年)190件のヒトのウエストナイル症例が確認されており、警戒と予防対策の必要性を強調している。ほとんどの場合が蚊に刺されたことによる感染であるが、他の罹患動物やその血液、あるいは他の組織との接触によっても感染が広がる可能性がある。母乳や輸血、臓器移植によってヒトに感染することはほとんどないが、経胎盤感染(母子感染)が1例記録されている。通常の感染予防対策がとられている場合は、医療従事者から患者へ、あるいは医療従事者から患者へ、何気ない接触によってヒトからヒトへ感染したという証拠はない。ウエストナイルウイルスは1937年にウガンダで発見され、ヒトへの感染は50年以上前から世界的に報告されている。この事例は、無症候性キャリアが感染拡大に寄与する可能性を示唆している。米国の血液製剤はウエストナイルウイルスについてスクリーニングされることになっているため、検査に失敗したか、又はウイルスが使用されたアッセイの検出限界を下回っていた可能性が考えられ、それでも輸血レシピエントに感染する可能性があった。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
9	コリネバクテリウム感染	PeerJ. 11(2023)e14895	<p><i>Corynebacterium silvaticum</i>は最近特定されたグラム陽性病原細菌の一種であり、新種として指定される前は、<i>C. pseudotuberculosis</i> 又は <i>C. ulcerans</i> として同定されていた。ドイツ、オーストリア、スイスのイノシシとノロジカ、ポルトガルの家畜ブタから分離されており、この細菌の感染が引き起こす疾患は、ヤギとヒツジにおいて <i>C. pseudotuberculosis</i> が引き起こす乾酪性リンパ節炎と類似している。<i>C. silvaticum</i> は、ジフテリア毒素(DT)を産生できる系統発生的に近縁な毒性種グループの一部である。<i>C. silvaticum</i> はDTを産生しない特徴があるが、ポルトガルのPO100/5株とオーストリアの05-13株は毒素遺伝子の特徴よりDTを産生することが示唆されている。家畜ブタからの分離と、ヒト上皮細胞における細胞毒性が最近証明されたことは、<i>C. silvaticum</i> がヒトの健康に対する潜在的な脅威となる人獣共通感染症であることを示唆している。本研究ではポルトガルの <i>C. silvaticum</i> の遺伝的多様性とDT産生の可能性をさらに調査するため、ポルトガル由来の8つの分離株の配列を決定し、38の公開株と比較した。配列決定と解析の結果、ポルトガル由来株は単系統株で、ほぼ同一であり、独特のクラスターを形成し、既知の36のコリネバクテリウム毒性因子/ニッチ因子のうち27を有することが示された。これらの分離株はすべてtox遺伝子のフレームシフトを欠いており、DTを産生することが示唆された。これらは2つの農場のブタから分離されており、単一クローンの拡散を表している。系統解析によると、<i>C. silvaticum</i> は2つのクレードに分岐している。クレード1は、ポルトガルの単系統株とオーストリアの05-13株を代表とする、DT産生能力を持つことが示唆された株で構成されていた。クレード2は、オーストリア、ドイツ、スイスの株を代表とする、フレームシフトしたtox遺伝子のためにDT産生能力のない株で構成されていた。10のゲノムクラスターが検出され、その中でドイツ由来の株が最も多様であり、ポルトガル由来株は排他的クラスターに属していた。野生動物と家畜における存在、ヒト上皮細胞に対する細胞毒性、おそらくはDT産生能力を有することにより、<i>C. silvaticum</i> は人獣共通感染症及びジフテリアを引き起こす可能性がある。本研究で特定されたクラスター、クレード、ポルトガル由来株の排他的共通遺伝子と排他的配列型に関する情報は、<i>C. silvaticum</i> の同定と疫学に適用することができる。</p>
10	サル痘	Emerg Infect Dis. 29(2023)1872-1876	<p>○日本の2023年1月～3月における男性間性交渉者(MSM)の無症候性エムボックス有病率 エムボックス感染拡大初期の2023年1月～3月の期間で、過去3か月以内に性交渉のあった18歳以上のMSMにおいて、被験者登録時にエムボックス症状なしと申告した者1,346人について検体(肛門直腸の拭い液、初尿・うがいと洗口液をプールしたもの)を採取し、エムボックスPCR検査を実施し、その後のエムボックス発症状況の有無について評価を行った。1,346人のうち、PCR陰性と判定された被験者は1,341名であったが、この中には、検査実施後13～53日を経過して発症した4名が認められた。またPCR陽性と判定された5名のうち発症した被験者は2名(登録前の発症が試験開始後に判明した1例と非典型症状の1例)であった。残り3名は1か月経過後も症状が現れない無症候性感染者であった。なお、9名のエムボックス感染者のうち4名はHIV陽性で抗レトロウイルス療法を受けていた。今回の評価により無症候性感染者数が過小評価されており、日本でエムボックス感染拡大初期には、MSMの集団内で無症候性感染者と症候性感染者が類似する規模で存在した可能性が示唆された。このことからエムボックスの感染リスクが高い集団の検査へのアクセスを改善する必要があると考える。</p>
11	サル痘	Transfusion. 63(2023)690-695	<p>○エムボックス感染拡大時に英国で供血された血液に対するエムボックスウイルスPCR検査 2022年5月、主に男性間性交渉者でエムボックス感染の世界的な大流行が発生した。南イングランドでの流行期にあたる2022年8月に供血された血液について、原因病原体であるエムボックスウイルス(MPXV)の陽性率を評価した。PCR検査に使用した454本のミニプール(24検体で構成)は、南イングランドの10,896件の供血から得られ、その21%はロンドンで供血されたものであった。検査の結果、陽性のミニプールはなかった。供血者層は、MPXV感染リスクに関して英国の人口全体を代表する層ではないものの、検査結果が一様に陰性であったことは、感染拡大期にウイルス血症及び潜在的なMPXV伝播リスクを有する供血者が稀又は皆無であったことを確認する結果となった。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
12	バルトネラ症	Israel Journal of Veterinary Medicine. 78(2023)24-33	ナイジェリアではウシは人間にとって最も重要な動物性タンパク質の供給源で、主に大規模な生産システムの下で飼育されている。この管理システムは低コストではあるが、動物をいくつかの外部寄生虫やベクター媒介感染症にさらし、獣医学や公衆衛生に影響を与える。バルトネラ症は、獣医学や人獣共通感染症に影響を及ぼす新たなベクター媒介感染症である。本研究では、ナイジェリアの3つの農業生態学的区域(AEZ)、Sahel, Savanna, Guinea AEZの、それぞれ2州、5州、3州のウシから採取した462件の血液サンプル(3つの食肉処理場と7つの定住群に由来)を用いて、PCR法と配列決定で <i>Bartonella</i> DNAの存在を調べた。 <i>Bartonella bovis</i> のクエン酸合成酵素遺伝子(<i>gltA</i>)とRNAポリメラーゼβサブユニット遺伝子(<i>rpoB</i>)のDNA断片が、調べたサンプルのうちそれぞれ43件(9.3%)と6件(1.3%)で検出された。本研究で得られた <i>gltA</i> 配列と <i>rpoB</i> 配列は、GenBankによって寄託された <i>B. bovis</i> の配列と97.6%から99.8%の高い同一性を有していた。 <i>B. bovis</i> DNA保有率は、2歳以上のウシ、食肉処理場で屠殺されたウシで高く($p < 0.05$)、性別、品種、身体状態、生態学的区域との有意な関連性は認められなかった。これはナイジェリアのウシにおける <i>B. bovis</i> の最初の報告である。本研究におけるウシの <i>B. bovis</i> DNAの保有率9.3%(<i>gltA</i>)と1.3%(<i>rpoB</i>)は、過去に報告されたセネガルの27.8%、アルジェリアの15.3%よりも低かった。しかしケニアのウシでは <i>Bartonella</i> 属の保有率が0%と報告されている。この違いは、研究デザイン、標的となる遺伝子、各研究で使用された分析法の感度に起因する可能性がある。本研究では食用として屠殺されたウシからの検出率が高く、食肉検査法の施行が困難であることを考慮すると、これは公衆衛生上の懸念の源である。ナイジェリアでは、 <i>Bartonella</i> 属の疫学と公衆衛生への影響を解明するためのOneHealth概念に沿ったさらなる研究を実施し、食肉処理場の衛生状態を改善し全国で食肉検査政策を効果的に実施するための取り組みを強化すべきである。
13	マイコバクテリウム・ケロナエ感染	ansm. https://ansm.sante.fr/actualites/impression/4310	Biointegral Surgical Inc (BIS)の心臓弁及び生物学的弁付き導管について、同社は、該当製品(ロット番号NR200830及びNR201115)に <i>Mycobacterium chelonae</i> が存在する可能性を調査している。2020年、2021年、2022年にBerlinでそれぞれ発生した <i>Mycobacterium chelonae</i> の3例と2022年にフランスで発生した1例が存在する。2022年4月14日、BISは欧州の全顧客に対し、移植された患者において <i>Mycobacterium chelonae</i> 心内膜炎の症例が確認されたこと、及びドイツの研究所在が移植されていない2つの弁から <i>Mycobacterium chelonae</i> の痕跡を検出したことを受け、ブタ由来の生体心臓弁及び弁導管の移植の中止と検疫を要請した。フランスANSMは、ドイツ医薬品庁(BfArM)と連携し、BISとの合意のもと、ドイツとフランスのマイコバクテリア基準センター(CNR)がコーディネートした分析を委託したところ、検査した12個の器具のうち11個が <i>Mycobacterium chelonae</i> 陽性であった。デバイスを植え込まれた患者372人のうち356人について、2015年から2022年4月14日までの期間の情報が収集され、回答率は95.69%であった。合計で、2015年から2022年の間に発生した <i>Mycobacterium chelonae</i> に関連する心内膜炎の非重症症例がフランスで1件報告されている。2023年7月1日現在、フランスで新たに報告された <i>chelonae</i> 心内膜炎の症例はない。

ID	感染症(PT)	出典	概要
14	リフトバレー熱	Viruses. 15(2023)1346	<p>リフトバレー熱(RVF)はリフトバレー熱ウイルス(RVFL)によって引き起こされる蚊媒介性人獣共通感染症で、ヒトでは熱性疾患と網膜炎、肝炎、出血性・神経性症候群などの合併症を、動物では若い個体の死亡や成獣の流産を引き起こす。ガーナ周辺を含む西アフリカ諸国ではRVFの発生が報告されているが、ガーナではまだ症例が確認されていない。本研究ではガーナ南部の家畜と畜産農家におけるRVF循環の確認、その血清陽性率の推定、関連するリスク因子の特定を目的とした。ガーナ南部の2つの地区(Ga SouthとKwahu East)の165の農場で、ヤギ253頭、ヒツジ246頭、ウシ220頭、畜産農家157人の血清試料を採取し、抗RVFV IgG抗体、IgM抗体について検査した。家畜における抗RVFV抗体の全体的な血清陽性率は13.1%であり、47の農場(28.5%)でRVFV血清陽性動物が認められた。種ごとの陽性率は、ウシで24.1%、ヒツジで8.5%、ヤギで7.9%であった。農場の約半数(51.7%)は過去数か月間の流産発生を報告したが、記録が不十分であったため流産率は計算できなかった。畜産農家の抗RVFV抗体血清陽性率は17.8%、IgM血清陽性率は8.3%だった。血清陽性者28人のうち13人(46%)はIgM血清陽性で、13人全員がKwahu East 在住であった。IgMは一般にウイルス感染後2-3か月で減少するため、Kwahu Eastの畜産農家が過去数か月以内にRVFVに曝露していたことが示された。本研究では、ガーナ南部のヒトと家畜におけるRVFV循環が初めて示された。ガーナではRVFVが国内に存在しないと考えられており、家畜へのRVFワクチン接種が行われたことがないため、ワクチン接種が血清陽性の原因であるとは考えられない。また、最近のヒトへの重大な曝露にもかかわらずRVF症例は検出されていない。RVFは見落とされたり他の疾患と間違えられることが多く、ガーナにおけるアウトブレイクが検出されていなかったことが示される。ガーナのRVF疫学と社会経済的影響をよりよく理解するために、One Healthアプローチが推奨される。</p>
15	リーシュマニア症	Mem Inst Oswaldo Cruz. 118(2023)e220220	<p>リーシュマニア症は一般的に、ヒトといくつかの家畜及び森林に生息する動物に影響を与える人獣共通感染症であるが、ウマのリーシュマニア症又はリーシュマニア感染に関連する疫学的データは乏しい。しかし、世界の様々な地域で行われた研究で、<i>Leishmania braziliensis</i>、<i>L.infantum</i>、<i>L.martiniquensis</i>に寄生されるウマ科が明らかとなった。本研究では、リオデジャネイロ州(ブラジル)に生息する雌馬の皮膚リーシュマニア症(CL)の原因となる<i>Leishmania</i>種を同定し、分離した寄生虫におけるリーシュマニアウイルスの存在を探索することを目的とした。2020年4月、ブラジル、リオデジャネイロ州、Cachoeiras de Macacu自治体に住む4歳のMangalarga Marchador雌馬の左耳介に治療困難の既往を伴う多発性皮膚病変が発現しているのが観察された。左耳介に認めた潰瘍から皮膚生検サンプルを収集し、培養培地で寄生虫を分離した。DNA抽出とPCR分析を実施し、<i>Leishmania</i>の検出と種同定を行った。培養した寄生虫(IOC/L 3810)から抽出したDNAを、<i>Leishmania</i> ITS1rDNAを標的としたPCR増幅にかけたところ、約320bpのPCR産物を得た。PCR産物の配列をBLASTnツールを用いてGenBankオンラインデータベース(ncbi.gov)で利用可能なITS1rDNA <i>Leishmania</i>の配列と比較した結果、<i>L.martiniquensis</i>及び<i>L.siamensis</i>と高い同一性を示した。<i>L.martiniquensis</i>は、1995年にマルティニーク島でCLのヒト患者から初めて分離された種である。<i>L.martiniquensis</i>における<i>Leishbunyavirus</i>(LBV)の存在について利用可能な情報を考慮し、このウイルスの存在を検索した結果、LBVフラグメントを標的としたPCR後に陽性結果が得られた。LBVシーケンス結果(288 bp)をBLASTn検索にかけた結果、<i>L.martiniquensis leishbunyavirus</i> 1(MK356554.1)と98.61%の同一性を示した。分離した寄生虫をLBVに感染した<i>Leishmania</i> (<i>Mundinia</i>) <i>martiniquensis</i>と同定し、南米におけるこの種の初めての報告となった。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
16	レンサ球菌感染	ProMED-mail 20230315.8708940	<p>ベトナム保健省は、ここ数ヶ月の間に多くの人への感染が確認されたことを受け、ブタ由来の細菌である <i>Streptococcus suis</i> の疑い例に対する警戒を医療機関に促したと現地メディアが火曜日(2023年3月14日)に報じた。同省の感染症監視システムの報告によると、今年(2023年)の1ヶ月間に、全国で多くのレンサ球菌感染が記録されていることがわかった。Hà NộiのSóc Sơn地区の医療センターは、血液プリンを食べてアナフィラキシーショックを起こした患者を救うことに成功したと報告した。Phù Linh Commune在住の51歳は、皮膚が赤くなり、胸部絞扼感、息切れ、血圧上昇のため入院した。患者は、アレルギーはなく、健康状態も良好であったという。2023年3月1日、Bãi Cháy病院の医師は、発熱を呈する中国人患者を受け入れた。この患者は <i>Streptococcus suis</i> の検査で陽性だった。彼は12日間の治療後、現在は安定した健康状態にある。先月(2023年2月)、Hà Đông区に住む52歳の、血液プリンを販売するレストランのオーナーである男性がこのウイルスに感染し、<i>Streptococcus suis</i> の最初のヒト感染例が記録された(<i>S. suis</i>は細菌であり、ウイルスではない)。103軍病院で検査を受けた男性は、高熱、悪心、嘔吐を呈している。同省によると、患者の大半は、血液プリンなどの豚肉製品を食べた人、又はブタを屠殺した人である。患者はしばしば重い臨床症状に苦しみ、長期的で高価な治療が必要であった。一度「細菌」に感染すると、病状は急速に進行し、敗血症性ショック、昏睡、多臓器不全などの合併症を引き起こす。1960年に最初の患者が確認され、それ以来、約490人の患者が発生し、そのうち死亡率は17.5%となっている。ベトナムでは、過去数年間に約10人の患者が国立熱帯病病院に入院している。</p>
17	旋毛虫症	ProMED-mail 20230906.8711979	<p>ブエノスアイレス州は、ブエノスアイレス州の21の自治体における旋毛虫症確定例217例と調査中239例を記録した。ブエノスアイレス州保健省によると、これらの症例は今年(2023年)発生した5件のアウトブレイクによる合計数である。州保健局の最新の疫学速報によると、2023年8月25日までに旋毛虫症の疑い例495例が報告され、このうち217例が確定例、38例が可能性例、239例は調査中である。「2023年現在、チビルコイ(25週の疫学速報)、コロネル・ドレーゴ(29週の疫学速報)、アジャクーチョ及びラス・フローレス(29週の疫学速報)の4件の旋毛虫症アウトブレイクが記録されており、31週の疫学速報では衛生管理区域I及びIIのいくつかの自治体(アドルフ・アルシーナ、パイア・ブランカ、コロネル・スアレス、グアミニー、プアン、サアベドラ、ヒポリト・イリゴジェン、リバダビア、サジケロー)に広がるアウトブレイクが記録された。」と疫学速報で詳細に述べた。また、「チビルコイのアウトブレイクでは5例、コロネル・ドレーゴで1例、アジャクーチョ及びラス・フローレスで15例、最近のアウトブレイクで187例が確定例とされた。」とも述べられている。「全ての症例は良好な経過であり、一貫した治療が提供された」と州保健省は強調した。確定例217例は、アドルフ・アルシーナ、パイア・ブランカ、コロネル・スアレス、プアン、グアミニー、サアベドラ、ヒポリト・イリゴジェン、リバダビア、サジケロー、フニン、エセイサ、ルハーン、アジャクーチョ、ルカルセ、タンディル、ラス・フローレス、ヘネラル・ラ・マドリッド、チビルコイ、25デ・マージョ及びレゼマの自治体在住であった。アウトブレイクの発生源チビルコイの自治体で、旋毛虫症疑いのアウトブレイクは自家製の豚肉ボンディオラの消費に起因しており、本症例では市の保険事務局と衛生管理区域Xの代表が協力してアウトブレイクの集中的で阻止を目的とした管理措置を調整した。同じ事象はコロネル・ドレーゴでも発生し、そちらでは自家製の豚肉を消費していた。アジャクーチョでは自家製の豚肉(加工肉製品、ソーセージ)消費による家庭内アウトブレイクが発生し、国立農業食品保健品質サービス(SENAS)A)、自治体の人獣共通感染症及び栄養学局による管理が実施された。アドルフ・アルシーナ、パイア・ブランカ、コロネル・スアレス、グアミニー、プアン、サアベドラ、サジケローを含む旋毛虫症のアウトブレイクはChacinados Factory Agroindustria Los Anders SRLの製品を消費した人々に端を発していた。旋毛虫症とは旋毛虫症は、トリキネラ属線虫の幼虫又は成虫寄生虫により引き起こされる寄生虫症で、ヒト、家畜や野生の哺乳類、トリ、爬虫類に感染する。この人獣共通感染症は、生存可能な筋肉幼虫を含む生や加熱不十分な肉、食肉加工品の消費によりヒトへ偶発的に感染する。肉消費による感染及び毒性を予防する鍵 ブエノスアイレス州の旋毛虫症アウトブレイクは主に低温の時期に発生し、過去の症例の時間的分布では7月から10月に増加すると示されている。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
18	日本脳炎B型	IASR. 44(2023)27-28	<p>千葉県においては2015年に1例の日本脳炎症例の報告があつて以来、発生は確認されていなかったが、今般、本県において約7年ぶりとなる患者が届出された。患者は千葉県内在住の60代女性。2022年9月15日朝、自宅で意識不明の状態で見送られ、医療機関へ救急搬送された。持病や既往歴、日本脳炎ウイルス(JEV)ワクチン摂取歴は不明であるが、発症日前日(9月14日)までは特段変わった様子はみられなかった。救急外来での診察では、項部硬直は認めなかったが、発熱と意識障害(開眼しているが意思疎通はとれず、GCS E4V2M5)を認めた。髄液検査では、初圧(140mmH2O)、細胞数149/μL(多核球91%)、タンパク57mg/dL、糖53mg/dL(血糖110mg/dL)であり、細胞数増多と蛋白高値を認め、グラム染色による塗抹検査では菌が確認されなかった。細菌性髄膜炎、ウイルス性髄膜炎を想定し、セフトリアキソン、バンコマイシン、アンピシリン、アシクロビルによる治療を開始した。血液培養、髄液培養、髄液の単純ヘルペスウイルスPCR検査はいずれも陰性であったが、意識障害は徐々に悪化し、昏睡状態になった。同年9月22日、管轄保健所に病原体不明の急性脳炎(5類感染症)として感染症法に基づく発生届が提出された。それにもない、9月26日に千葉県衛生研究所(以下、当所)に当該患者の髄液倦怠(9月16日採取)が搬入され、9月27~28日にかけて当所で定めた急性脳炎検査受託時の検査項目について網羅的ウイルス検索を実施した。ヒトヘルペスウイルス(1-7型)、エンテロウイルス属、ムンプスウイルスのreal-time PCR検査を実施し、すべて陰性であった。その後、医療機関にて居住地域を含めた病歴、及び当該患者のMRIによる画像所見(左視床、左中脳に拡散強調像、FLAIR像で高信号域)から、日本脳炎が鑑別診断として考えられたため、10月4日に診療担当医から管轄保健所を通じて、日本脳炎の追加検査が依頼された。10月5~6日にかけて当所において、国立感染症研究所の病原体マニュアルに準拠し、髄液検体に対してJEV遺伝子(E遺伝子の一部)検出検査を実施したところ、nested RT-PCR検査で陽性となった。またこのPCR産物についてサンガー法にて塩基配列を決定したところ、近年国内で主に検出されている株と同様に遺伝子型I型であることが判明した。これらから10月6日に診断が日本脳炎と確定したため、同日に急性脳炎の発生届は取り下げられ、日本脳炎の発生届が提出された。2022年の本県におけるブタのJEV抗体保有状況は7~8月では10~40%、9月には20~100%で、当該期間中に2-mercaptoethanol(2ME)感受性抗体陽性率も50%に達しており、数か月以内の感染を示唆する抗JEV IgM抗体を有するブタが県内に存在し、感染リスクがあつたことが示唆された。</p>
19	日本脳炎B型	ProMED-mail 20230321.8709076	<p>保健省は、Kimberley地域の住民及び旅行者に対し、最近の日本脳炎ウイルスの活動状況を確認し、蚊に刺されないよう呼びかけている。日本脳炎ウイルスの活動は、蚊が媒介するウイルス疾患の早期警告システムとして機能している保健省のトリ指標監視プログラムによって確認されている。KimberleyのKununurra及びWyndhamのトリの群れからの、陽性となったサンプルは2023年2月に採取されており、過去2か月間に感染が発生したことが示唆された。本件は、先週報告されたブタから採取したサンプルと併せて、Kimberleyでの日本脳炎ウイルス感染のリスクの継続を示唆している。オーストラリアでは、2021年1月以降、New South Wales、Queensland、South Australia、Victoria、及びthe Northern Territoryで日本脳炎のヒト症例が45例報告されており、7例が死亡した。Western Australiaでは、これまでのところ、ヒトの日本脳炎症例は報告されていない。</p>
20	梅毒	Sex Health. 20(2023)370-372	<p>全国サーベイランスデータによると、梅毒症例の前例のない増加が報告されている。2022年の第1週から42週までの症例数は10,141例に達し、すでにこの時点で1年間の症例数としては過去50年間で最多となった。また、この症例数は2021年の同時期と比べ1.7倍であり、第1期及び第2期の梅毒(早期顕症梅毒)が全体の77.4%を占めた。人口10万人当たりの症例数は東京都と大阪府で最も多かったが、この急激な増加は全国的なものであった。また、異性間性的接触のある男性と若い女性の感染が圧倒的に多かった。近年、感染数総数とともにすべての報告に対する早期顕症梅毒の割合が増加していることから、発生率の増加は単なる検査数の増加によるものではなく、真の増加を示していると考えられた。感染者の年齢分布は性別によって大きく異なり、男性は主に20~50歳にピークがあるのに対し、女性は20歳代前半が多かった。新型コロナウイルス感染症のパンデミック中の梅毒の急増は、深刻な公衆衛生上の懸念をもたらし、適切な検査と予防措置の重要性を強調した。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
21	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	GOV.UKホームページ. https://www.gov.uk/government/news/ban-lifted-on-use-of-uk-plasma-to-manufacture-life-saving-albumin-treatments	救命用アルブミン治療薬製造のための英国からの血漿の使用禁止が解除された。最近まで、変異型クロイツフェルト・ヤコブ病(vCJD)の蔓延に対する安全性の予防措置として、血漿由来医薬品の製造に対し英国から提供された血漿を使用することが禁止されていた。2020年、別の種類の血漿由来医薬品である免疫グロブリンの製造に対し、英国産血漿の使用禁止が解除された。英MHRAは現在、エビデンスのさらなるレビューを受けて、Commission on Human Medicinesも英国からのalbuminを用いた患者の治療禁止を解除するよう勧告したことを確認することが可能である。血液及び血液成分の収集を許可されたすべての組織、及び血漿由来医薬品の製造業者は、leucodepletion(白血球の除去)、高リスクのドナーの延期及びドナーと患者間の提供を追跡する機能など、免疫グロブリン製造に採用されたものと同様の確固たる安全性基準及びリスクの軽減措置を順守し続けなければならない。1999年にleucodepletionが導入されて以降、vCJDの輸血感染、及びvCJDの報告はないことなどについて記載されている。
22	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20230520.8710163	問題点:米国のウシ1頭において非定型の牛海綿状脳症(BSE)L型が確認された。【概要】米国における非定型BSEに関する情報。米国農務省(USDA)は、サウスカロライナ州のと畜場の約5歳以上の食用ウシ1頭におけるBSEの非定型症例を発表した。本症例は米国で確認された7例目のBSEである。当該ウシはと畜場チャネルに入ることはなく、米国内の食料供給及びヒトの健康に危害を及ぼすこともなかった。米国のBSEのリスクはごくわずかであることから、本調査結果による貿易への影響は予想されていない。USDA動植物衛生検査局(APHIS)の国立獣医サービス研究所は、当該ウシが非定型L型BSEに対し陽性であることを確認した。当該ウシはAPHISがと畜に適さないと判断したウシの定期的監視の一環として検査された。当該ウシに装着した高周波識別タグはテネシー州のウシ集団と関連付けられている。APHIS及びサウスカロライナ州ならびにテネシー州の獣医当局は、現在進行中の調査の間により多くの情報を収集している。
23	異型クロイツフェルト・ヤコブ病	ProMED-mail 20230524.8710224	問題点:米国のウシ1頭において非定型のL型BSEが確認された。【概要】米国における非定型BSEに関する情報。米国のBSEの標的サーベイランスプログラムの一環として、9歳のウシ1頭で非定型BSEの症例が確認された。この非定型BSE症例はL型に分類された。25年以上のサーベイランス中に米国で検出された6つの国内症例はすべて非定型症例であった。当該ウシはいかなる食料供給チャネルにも入らなかったため、ヒトの健康に危険を及ぼすことはなかった。特定危険部位の除去及び反芻動物から反芻動物への飼料規制は引き続き効果的に適用されている。国内での規制措置として、死体・副産物・廃棄物の公的処理、スクリーニング、トレーサビリティが適用された。
24	細菌感染	Antibiotics. 12(2023)792	ウマは多剤耐性菌の貯蔵庫と考えられており、環境を介して、場合によっては人間にも多剤耐性菌が広がる可能性がある。ウマの微生物叢の研究は徐々に進んでいるが、多くは消化管微生物叢の研究である。口腔微生物叢の研究は少ないが、動物咬傷は重度の感染症に移行する可能性があり、公衆衛生上の問題である。また、抗菌薬耐性は現代の差し迫った健康問題の一つであるが、ウマの医療においてはウマ専用の抗菌薬がないこと、一部の飼い主による誤った抗菌薬の無差別投与などの問題がある。抗菌薬耐性の進化を追跡し、制御手段の更新に貢献し、これらの薬剤の臨床使用を最適化するために、ウマの微生物叢に関するより多くの研究が必要である。本研究では、健康なウマの口腔グラム陰性菌微生物叢の特性評価を行い、One Healthアプローチで抗菌薬感受性プロファイルを評価することを目的とした。2022年7-12月にポルトガルの様々な地域で行われた定期的な口腔検査で、あらゆる種類の全身性疾患や口腔疾患がなく、過去6か月間に全身性・局所抗菌薬療法を受けていない、様々な品種と年齢のウマ30頭(3-23歳、6品種、雌14頭と雄16頭)を選び、歯肉下腔試料と歯肉縁試料を採取した。試料からグラム陰性菌を培養し、8系統27種の抗菌薬に対する感受性を試験した。55株のグラム陰性分離株が同定され、89.5%が人獣共通感染症の可能性があった(大腸菌、肺炎桿菌など)。62%はヒトに影響を及ぼし、環境中(土壌、水、植物)にも存在していた。48株(96%)は多剤耐性であり、表現型耐性はマクロライド系(81.8%)、β-ラクタム系(55.4%)、キノロン系(50%)に対して高く、スルホンアミド系(27.3%)、テトラサイクリン系、アンフェニコール系(ともに30.9%)に対して低かった。全体では、分離株の51.5%がカルバペネム系に耐性を示した。本研究は、ウマの口腔共生微生物叢とその感受性プロファイルに関する最初の報告で、カルバペネム耐性が初めて確認された。ウマの口腔共生微生物叢には人獣共通感染性・潜在的病原性株が含まれており、唾液が潜在的媒介物であることが示され、咬傷が公衆衛生上の懸念であるという概念が確認された。ウマは人間、他の動物、多くの異なる環境と密接な接触を持ち、競技などのため輸送されることも多く多剤耐性の運搬者となり得るため、多剤耐性の監視において重要な役割を持つ。

ID	感染症(PT)	出典	概要
25	細菌感染	ProMED-mail 20230803.8711548	<p>情報源: Gizmodo, Emerging Infectious Diseases</p> <p>英国で野良猫に咬まれた男性に広範な軟部組織感染を引き起こした新規の <i>Globicatella</i> についての報告。 <i>Globicatella</i> は、これまで2種が確認されており、ヒトへの感染を引き起こすことが知られているのは1種 (<i>Globicatella sanguinis</i>) のみである。研究者等は、今回の細菌の遺伝子配列、全ゲノム配列を決定し、生化学的プロファイリングにより新規の <i>Globicatella</i> と同定し、抗菌薬感受性を測定した。</p>
26	細菌感染	Transbound Emerg Dis. 2023(2023)6694913	<p><i>Chromobacterium</i> 属は7種が認められているグラム陰性桿菌で、主に熱帯・亜熱帯地域に分布し、水源や湿度の高い地域で多く分離される。 <i>C. haemolyticum</i> はイネの根、湖、川、放流下水などの様々な水環境から分離されており、主に水源を介して感染するエビデンスがある。 <i>C. haemolyticum</i> が創傷曝露歴や水源との曝露歴があるヒトにおいて肺炎や敗血症を引き起こす可能性があることを示唆する報告があり、これらの症例は <i>C. haemolyticum</i> が日和見病原体である可能性を示している。また、 <i>C. haemolyticum</i> に関連するヒトの下痢症例の報告もあるが、他の動物で <i>C. haemolyticum</i> が下痢や死亡を引き起こした例はまだ報告されていない。本研究では中国南部の多くの養豚場で発生した原因不明の子豚下痢症の症例に焦点を当てた。子豚の罹病率は30.65% (149/486)、その死亡率は35.57% (53/149) であった。下痢を引き起こす様々なウイルスに関する検査ではウイルスは検出されず、ヒツジ血液寒天プレートで非色素性β溶血性グラム陰性桿菌が分離され、これをGDHYZ30株と命名した。16SrRNA遺伝子配列から、この株が <i>C. haemolyticum</i> に最も近縁であることが示された。広東省の気候特性は <i>Chromobacterium</i> の繁殖により適しているため検出範囲を拡大した結果、原因不明の下痢をしている他の地域の水源や子豚の肛門スワブからも <i>C. haemolyticum</i> が検出された。抗生物質感受性試験は、分離された5つの <i>C. haemolyticum</i> がほとんどの抗生物質に耐性があり、いくつかの抗生物質に対する感受性は大きく異なることを示した。GDHYZ30株を経口投与と筋肉内注射で実験的に感染させた子豚では自然感染例と同様の臨床症状を再現することに成功し、筋肉内注射では死亡も認められ、この株が子豚の下痢と急性死を引き起こす病原体であることが示された。</p> <p>我々の知る限りでは、これは <i>C. haemolyticum</i> が子豚の下痢や死亡を引き起こし、水源を介して伝播する新しい病原体として議論された最初の報告である。臨床試験と薬剤耐性分析は、 <i>C. haemolyticum</i> がヒトと動物に対する潜在的な脅威であることを示した。本報告は食品の安全性だけでなく、人獣共通感染症の予防と制御のための参考資料となる。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
27	類丹毒	Emerging Microbes & Infections. 11(2022)2781-2784	<p>問題点: <i>Erysipelothrix piscisicarius</i>による初めてのヒト感染例(72歳女性)に関する報告。【概要】新たにヒトにおいて感染することが認められた感染症に関する報告。グラム陽性通性嫌気性菌の一種である<i>Erysipelothrix</i>属は、ブタで丹毒、ヒトで類丹毒を引き起こすことが知られている。<i>Erysipelothrix piscisicarius</i>は、魚の水産養殖における新規の病原体であり、魚の口腔顔面潰瘍及び壊死、壊死性皮膚炎、筋炎ならびに蜂巣炎を引き起こす。これまで<i>E.piscisicarius</i>のヒトへの感染は報告されていない。【症例報告】72歳女性、原因不明の高熱及び悪寒を訴え、入院した。救急外来では体温が40.2°Cに達し、頭痛、回転性めまい、息切れ、反応の遅れ、傾眠状態、尿閉がみられた。身体的診察では脈拍125bpm、呼吸数39回/分、血圧89/45mmHgであった。タゾバクタム・ピペラシリン(4.5 g q8h)が投与され、痰の減少や栄養サポートなどの対症療法が併用された。2日目には浮遊性めまい、頭痛、息切れなどの初期症状は軽減した。しかし、冷感を伴う発熱が続き、最高体温は38.0°Cとなったが積極的な治療により患者の体温は徐々に正常に戻った(3日目)。微生物学的原因を特定するための評価に血液培養とメタゲノム次世代シーケンシング(mNGS)が含まれ、mNGSでは末梢血から<i>E.piscisicarius</i>の9回の読み取りが検出され、血液培養の結果は<i>E.rhusiopathiae</i>の感染を示した(4日目)。この不一致のため、培養された微生物は全ゲノムシーケンス(WGS)に送られ、得られた配列は91.2%のカバレッジ率で<i>E.piscisicarius</i>の全ゲノムと一致した。その直後、患者の左親指の指先に赤く腫れた腫瘤が認められた。発症の3日前に患者がエビを洗っていたときに指を刺したと訴え、バナメイエビと特定された。患者は他の魚介類、家禽、家畜との接触歴がなく、臨床症状及び検査所見に基づき類丹毒と診断された。抗菌剤感受性試験は、分離された細菌がイミペネム、シプロフロキサシン及びピペラシリンに感受性であることを示唆し、感染症治療のためタゾバクタム・ピペラシリンが投与された。11日目に血液培養検査及びmNGSが共に陰性となったため患者は退院した。【結論】<i>E.piscisicarius</i>はヒトの感染症や疾患、水生動物の感染症を引き起こす可能性がある。本症例はmNGS同定とWGS確認を通じて、ヒトに重度の症状を引き起こす<i>E.piscisicarius</i>感染の初めての症例であった。海産物への曝露後に皮膚病変が形成されると、<i>E.piscisicarius</i>のような新たな病原体に警戒し、適切に治療しなければならない。従来の方と比較して、mNGSはより優れた検出性能を示し、臨床診療に有益であった。</p>
28	B型肝炎	Transfusion. 63(2023)1250-1254	<p>○HBs抗体のみ陽性の献血血液による輸血を介したHBV感染事例 60代男性患者に、HBV個別NAT、HBs抗原及びHBc抗体陰性で、HBs抗体のみ弱陽性の新鮮凍結血漿を輸血したところ、輸血72日後にHBV-DNA陽性となった。献血者と患者から検出されたHBV-DNAの遺伝子配列が一致したことから、輸血による感染が確認された。当該献血者のHBV感染状態について詳細は不明だが、HBVワクチン接種者のブレイクスルー感染、あるいはHBs抗体のみ陽性のオカルトHBV感染のどちらかの可能性が考えられる。ウイルス量も当該献血から84日後の時点で定量限界以下の低濃度であり、HBVの複製速度は極めて遅かった。本症例のような事例は稀ではあるが、低力価のHBs抗体を有する献血者が、輸血HBV感染を引き起こす場合があると考えられる。しかし、HBs抗体のみ陽性の献血者の中からそうした感染リスクのある者を特定することは、現状のスクリーニング検査では困難であり、HBs抗体のみ陽性血液の輸血HBV感染の可能性については、積極的サーベイランスが必要と考えられた。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
29	COVID-19	Viruses. 15(2023)1187	<p>記録によると、欧米ではSARS-CoV-2陽性のヒトと接触したペットや家畜における逆人獣共通感染症の発生が示唆されている。しかし、アフリカのヒトと接触した動物におけるウイルス拡散に関する情報はほとんどない。そこで本研究では、ナイジェリアの様々な動物種でSARS-CoV-2の発生を調査することを目的とした。COVID-19パンデミック中の2021年5-8月、2022年1-10月に、ナイジェリアのEbonyi州、Ogun州、Ondo州、Oyo州で、家庭や小さな裏庭農場などで人間と密接に接触して生活している様々な動物(ネコ、ウシ、ニワトリ、イヌ、アヒル、ヤギ、トカゲ[Agama agama]、ブタ、ハト、ヒツジ、シチメンチョウ)計791匹から、全血試料(トカゲ以外)、口腔及び直腸/総排泄腔スワブ試料を採取し、RT-qPCR(n=364)とIgG ELISA(n=654)を用いてSARS-CoV-2スクリーニングを行った。SARS-CoV-2陽性率は45.9%(RT-qPCR)と1.4%(ELISA)であった。SARS-CoV-2 RNAはハト以外の全ての動物種から検出され、陽性率はネコ50%(1/2)、ウシ70.8%(17/24)、ニワトリ26.3%(10/38)、イヌ51.5%(17/33)、アヒル66.7%(2/3)、ヤギ59.7%(46/77)、トカゲ61.3%(19/31)、ブタ4.3%(4/92)、ヒツジ89.3%(50/56)、シチメンチョウ14.3%(1/7)だった。Oyo州で採取された試料は全てRT-qPCR陰性だった。SARS-CoV-2 IgGは、Ebonyi州のヤギとOgun州のブタでのみ検出された。本研究の結果は、このウイルスの様々な動物への感染能力を強調している。過去にはウシ、ヒツジ、ヤギにおける実験的感染でRT-PCR陽性やウイルス複製が確認され、イヌやネコでは自然感染が報告されているが、本研究では初めて家禽、ブタ、家畜反芻動物、トカゲにおけるSARS-CoV-2自然感染が確認された。2022年のSARS-CoV-2の感染率は全体的に2021年よりも低く、これは2022年にはヒトのCOVID-19感染率が大幅に低下したことを反映していると推定される。また、Oyo州の試料は全て、Oyo州でCOVID-19症例が報告されなくなっていた2022年10月に採取されていた。これらの発見は、動物で検出されたSARS-CoV-2感染症がヒトから感染したという逆人獣共通感染を支持する。ウイルスの種間移動に伴い毒性と伝染性を高める変異が生じる可能性に備え、動物とヒトにおけるウイルスの継続的なモニタリングが推奨される。</p>
30	E型肝炎	<p>Outbreak News Today. https://outbreaknewstoday.com/czech-republic-officials-report-increase-in-hepatitis-e-79847/</p>	<p>チェコ共和国の保健当局は、モラヴィア・シレジア地方及び国全体でのE型肝炎患者数の増加を報告した。モラヴィア・シレジア地方の医師らは、以前はかなり稀であったE型肝炎患者数の増加に注目している。地域当局によると、昨年は21例がE型肝炎を発症したが、今年はすでに41例の感染者が医療機関を受診しており、このうち6例は6月に感染していた。「319例のE型肝炎が2022年に報告されていたが、今年は5月末までに221例の新規症例が報告されている。私たちは6月の集計を待っている。」と州保健研究所の広報担当者であるシュテパンカ・チェホバ氏は語った。A型肝炎と同様に、E型肝炎は水や食物を介して感染する。B型肝炎やC型肝炎とは異なっており、C型肝炎は血液を介して、B型肝炎は血液、性的接触、出産時の母子を介して感染する。以前、E型肝炎は飲料水の品質を含む衛生水準が劣悪な国への旅行と関連していた。しかし、医師らは次第に国内で休暇を過ごした人々の感染を診断し始めた。「2000年まで、チェコ共和国におけるE型肝炎は年間数例のみであった。」とオパバ・シレジア病院の感染症科長であるペトル・クンベル氏は語った。当時はアジアでの流行が知られており、中国で1986-1988年の間に120,000例が感染した。衛生士らによると、現時点のチェコ共和国で疾患が拡大するリスクはないとされている。しかし、罹患者数の増加が医師を悩ませている。例えば、2021年にオパバ病院へ入院したE型肝炎患者は2例のみであったが、昨年は5例、今年は12例であった。「しかし、より深刻なのは、以前の疾患経過は軽度であったという事実である。昨年は既に3例が非常に重篤な経過をたどり治療された。」とクンベル氏は指摘した。「おそらく、最近受け入れた患者は肝不全リスクがある。抗ウイルス薬での治療を開始し、感染経路の調査を試みている。」医師らは、加熱が不十分な肉、特に豚肉からの汚染ではないかと推測している。医師らによると、E型肝炎の危険性は肝リスクだけではない。「残念ながら、専門家の情報によると、E型肝炎は妊婦、特に妊娠第三三半期で非常にリスクが高いとのことである。」</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
31	E型肝炎	ProMED-mail 20230703.8710926	<p>チェコ共和国の保健当局は、Moravian-Silesian地方及びチェコ全土でE型肝炎の患者数が増加していると報告している。Moravian-Silesian地方の医師は、以前はむしろ稀であったE型肝炎患者の増加に気づいている。2022年には21人の患者がこの感染症に罹患したが、2023年にはすでに41人の感染者が医療機関を受診しており、そのうちの6人は2023年6月に感染した。「2022年には合計319人のE型肝炎患者が報告されたが、2023年には5月末までに221人が新たに感染した。私たちは6月(2023年)の統計を待っているところである」と国立衛生研究所の広報担当者、Štěpánka Čechováは述べた。A型肝炎と同様、E型も水や食べ物を介して感染するが、B型肝炎やC型肝炎とは異なり、C型は血液を介して、B型は血液や性的接触、出産時の母子感染によって感染する。E型肝炎は、以前は、飲料水の質など衛生水準の低い国への旅行と関連していた。しかし徐々に、医師らは休暇を自宅で過ごす人々の感染を診断するようになった。「2000年まで、チェコ共和国ではE型肝炎の患者は年に数人しかいなかった」とOpava Silesian Hospitalの感染症科長Petr Kümpelは言う。当時はアジアでの流行が知られており、中国では1986年から1988年の間に12万人が罹患した。衛生士によれば、今のところチェコでこの病気が広がる危険性はないという。しかし、病人の増加を医師は心配している。例えば、2021年にOpava Hospitalに入院したE型肝炎患者はわずか2人であったが、2022年には5人、2023年には12人であった。「しかし、もっと深刻なのは、以前は病気の経過が軽かったという事実である。しかし、2022年にはすでに非常に重篤な経過をたどる患者を受け入れている」とKümpelは指摘する。「例えば、最近受け入れた患者は肝不全の危険性がある。抗ウイルス治療を開始し、感染経路を探っているところである」。医師らは、加熱が不十分な肉、特に豚肉による汚染の可能性があると推測している。医師らによれば、E型肝炎の危険性は肝臓へのリスクだけではない。「残念ながら、専門家の情報によれば、E型肝炎は妊婦、特に妊娠第3期の女性にとって非常に危険である」。</p>
32	H1N1インフルエンザ	ProMED-mail 20230512.8710003	<p>Taiwan CDCは2023年5月11日、台湾中央部に住む軽度のインフルエンザに罹患した10代の男児1例の呼吸器サンプルから、A型インフルエンザウイルス(サブタイプ未分類)が分離されたと発表した。CDCによる更なる検査と遺伝子配列決定の結果、同ウイルスがH1N2vインフルエンザウイルスであり、2021年に国内で発生した1例目のH1N2v型感染者の遺伝子構成と類似していることが判明した。本症例の濃厚接触者3名を調査したが、いずれもインフルエンザウイルス感染は認められなかった。同CDCは、この症例は同国3例目のH1N2vインフルエンザウイルス症例であると述べた。この症例には最近の海外への渡航歴はなく、流行調査後にブタとの接触歴があった。2023年3月13日、発熱、鼻づまり、筋肉痛などの症状が出現した。翌日診療を受け、インフルエンザ迅速検査でA型インフルエンザが陽性であった。医師は検査結果を受け、インフルエンザ抗ウイルス薬を処方し、患者は回復した。CDCはさらに、女性の呼吸器検査培養後、2023年3月28日にインフルエンザウイルスが分離され、アデノウイルス、呼吸器シンシチアルウイルス、エンテロウイルス、ライノウイルスなど呼吸器感染症の一般的なウイルスが確認され陰性であることを指摘した。また、農業行政部門は、本件で接触した養豚場のブタの身体検査も行ったが、H1N2インフルエンザウイルスは検出されなかった。</p>
33	H1N1インフルエンザ	WHOホームページ. https://www.who.int/emergencies/disease-outbreak-news/item/2023-DON473	<p>2023年6月7日、ブラジルは、同国内部のParana州において、ヒトのブタ由来インフルエンザA(H1N1)変異(v)ウイルス感染の死亡例(検査確定例)1例をWHOに通知した。この患者は基礎疾患のある42歳女性で、ブタ農場の近くに居住していた。2023年5月1日に発熱、頭痛、咽頭痛、腹痛を発症し、5月3日に重症急性呼吸器感染症で入院した。5月4日、患者は集中治療室に入院し、5月5日に死亡した。継続中の調査により、この患者はブタとの直接的な接触は無かったと報告されたが、この女性の濃厚接触者のうち2人がブタ農場に勤務していた。この2人の接触者は呼吸器疾患を発症しておらず、インフルエンザの検査に陰性を示した。これまでのところ、この症例に関するヒトからヒトへの感染は特定されていない。入院中、定期的な呼吸器ウイルスサーベイランス活動の一環として、インフルエンザ及びSARS-CoV-2検査のために、患者から鼻咽頭スワブサンプルが採取された。リアルタイムポリメラーゼ連鎖反応(RT-PCR)がパラナ州中央公衆衛生研究所で実施され、サンプルはインフルエンザA/H1ウイルスとして亜型分類された。この検体は、RT-PCRによりブタインフルエンザAウイルスマーカーも陽性であった。この検体はリオデジャネイロの国立インフルエンザセンター・オズワルド・クルス財団に送られ、さらなる補完的解析とゲノム配列決定が行われた。5月25日にNICに届いた検体は、5月30日の配列解析でインフルエンザA(H1N1)vウイルスであることが確認された。回収されたゲノムは、2022年にパラナ州トレド市で検出された他のインフルエンザA(H1N1)vウイルスの赤血球凝集素(HA)と高い同一性(99%)を有している。さらに、2015年にブラジルでブタから採取されたウイルスのHAと96%の同一性がある。</p>

ID	感染症(PT)	出典	概要
34	H1N1インフルエンザ、インフルエンザ	Wkly Epidemiol Rec. 98(2023)111-126	2022年9月20日～2023年2月20日の期間に、インフルエンザA(H1N1)vウイルス感染がブラジルで1例(clade 1A.3.3.25)及び中国で2例(1件はclade 1C.2.3、1件は配列確認中)確認された。A(H1N2)vウイルス症例2例が報告され、オランダ(clade 1C.2.2)及び台湾で各1例(clade 1C.2.5)であった。罹患前のブタへの軽度の接触がブラジル及びオランダにおける症例で報告されたが、その他の症例では不明であった。